

タイトル：儲け損なうビジネス～舞台芸術事業の課題～

執筆者：目時壮浩ゼミ所属 武蔵大学経済学部経営学科 4年 齋藤優芽花

ミュージカルをはじめとする舞台事業は、なぜ「儲け損なうビジネス」と呼ばれているのか。本研究で検討する舞台事業とは、営利企業による舞台芸術創造を対象とする。ジャンルはミュージカル、ストレートプレイを中心とした舞台芸術を想定し、規模は座席数 300 席～1500 程度を想定し、主に中～大劇場を対象とする。

新型コロナウイルス感染症の影響により、ライブエンタテインメントである舞台事業は大きな打撃を受けており、存続の危機に関わるほどの状況に置かれていると言える。しかし、舞台業界の収益性や経営の問題は、コロナウイルス流行以前から存在していたものであり、コロナ禍によってそれが露呈したという側面もあるのではないだろうか。もちろん、舞台事業特有の性質からして、コロナ禍において経営が不利になるというのは避けられないものではある。しかし、私はコロナウイルスが流行するよりも前から、持続可能性の観点で、舞台業界のビジネスモデルや戦略に疑問を抱いていた。また、舞台の表現や文化としての役割ではなく、経営という事業の側面に焦点をあてた研究は数が少なく、業界全体として知見が共有できていない現状がある。

このような理由から、舞台というエンタテインメントを今後も持続可能にしていくための課題や今後の在り方について、事業経営の視点から検討することを試みた。

先行研究や近年の日本の主な舞台事業者における事例を整理し舞台事業が儲け損なう課題を整理し、それら問題を回避している方策について検討した。結果、多岐にわたる費用と、舞台芸術の経済構造上の特性、費用と生産性の関係性が舞台事業を儲けにくくしていることがわかった。そして、今後の舞台事業の継続には「売上の柱を複数立てること」「著作権の緩和」が求められることがわかった。

本論文では、舞台事業の枠の中を向いた議論にとどまったが、舞台事業の素晴らしさを守り持続可能にしていくには、業界の垣根を越えた協業やこれまでの価値観の改革など、まだまだ議論、新構築すべきことは多く残されている。